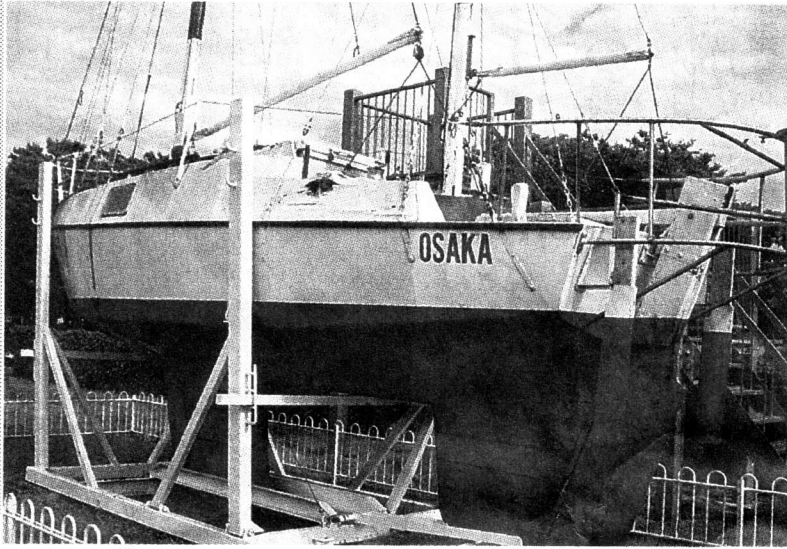


栄光のヨット 雄姿再び

信天翁二世号

展示28年 保存へ化粧直し

世界一周航海に成功した後、吹田市の万博記念公園で28年間屋外で展示される間に傷みが目立っていたヨット、「信天翁二世号」の写真、02年7月写すⅡの本格修復が決まった。日本万国博覧会記念協会と市民団体「あほうどりの会」、それにこのヨットで世界一周を達成した青木洋さん(53)が、今後の管理や修復費用の負担などを話し合っており、近く協定書を取り交わす。今年の春、桜が満開のころには、化粧直した二世号がお目見えする。



青木 洋さん

長さ6・4メートルの二世号は風雨にさらされ、ペンキははげ、デッキや船体下部のキール、かじなどが腐ってきた。公園の近くに住む上田昭三(関西大名誉教授75)が昨年3月、朝日新聞の專欄に「世界に誇る栄光のヨットが痛ましい」と投書。これをきっかけに、修理保存に向けた市民活動が始ま

万博記念協・市民団体と 費用負担など合意

り、会員2000人のあほうどりの会が設立された。その後、協会、あほうどりの会、青木さんの三者が話し合った結果、昨年末に協力して修復保存することで合意し、今月16日には維持管理に関する協定書がまとまった。

ヨットの修復には650万円かかるとみられるが、協会が350万円を負担。残る300万円をあほうどりの会に寄せられた寄付金や青木さんの出資などでまかなう。維持管理にあたっては協会は二者の協力を得るとし、定期的な塗装は、あほうどりの会が青木さんのアドバイスを受けて行うなどとなっている。

ヨットは22日、万博公園から青木さんが経営する田尻町のヨットスクールに運ばれ、修復作業が始まっている。ヨット仲間もボランティア参加し、3月末にはマストの補強やブームの修理などを終える予定だ。

あほうどりの会の中村茂夫会長は「高校生が二世号を見学に来て、感激して帰った。青木さんの冒険は世代を超えて共感を得ている。修復が完成したら進水式を、という話も出ていた。保存できてよかった」という。

青木さんは「28年余りも前のことで、このまま忘れられるのか、と思っていた。二世号を見るたびに元気が出る、保存する価値は高い、と多くの人に言ってもらえて幸せです」という。博覧会協会の岡上敏彦業務1課長補佐は「善意のみなさんに募金までしてもらって恐縮している。これからも愛好者の方と協力して管理していきたい」と話している。

信天翁二世号 木の骨組みにベニヤ板を張り付けた、青木洋さんの手作りヨット。71年、堺市の石津港から1人で世界一周に出向く。3年2カ月後の74年に帰港して、わが国初めての世界一周に成功した。ギネスブックに世界一周最小艇として掲載された。

